

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和五十八年十一月十五日 発行（毎月一回・十五日発行）

（通第四一—二号）

目次

涅槃の極果、菌林の遊戯……………	近角常観……………	(1)
共に是れ凡夫なるのみ……………	白井成允……………	(5)
耳の底にのこるもの……………	柳瀬留治……………	(10)
青蓮華……………	井上善右エ門……………	(15)
慈光日誌抄……………	西元宗助……………	(18)
久遠之友……………	花田正夫……………	(21)

慈光

第三十五卷 第十二号

涅槃の極果、蘭林の遊戯

近 角 常 觀

「浄土真宗の勸化は、平生業成の信の一念にて往生の得否は定まるものなり、これみな弥陀他力本願の強縁にもよほさるることと心得べきなり」と言える善知識の御教訓は、わが父が最後の際に至るまでの信仰の鑑であった。そして私に身をもってその味を知らして下さった。特に平生業成の意味がわかった。全体父は持病のために深き昏睡に陥らるる事が多かったゆえ、人生上の事は大抵みな違つておつたが、その間において信心上のことだけは益々確實であつた。日が暮れてから夜に入るに従つて、星の光の明らかになることがわかつて来るように、信仰の有様は少しも平生と異なることはないけれども、身体も不自由になり、口にはうわごとばかりを言い、精神上も間違いがちになるに従つて信仰の間違ひなきことがひととき、よく目立って来た。最も驚いたのは、身体に随分甚だしい苦痛があつたにもかかわらず、身体の苦痛と心の安慰とが別々になつておつた。うわごとと読経とは、出てくるところが別のような気持がし

た。や、もすれば、平生業成とは平素に手廻しをして置くことで、平素に役済みであるから、死の際には信心が消えて仕舞つてもよいのであると誤解しておる者がある。こんな信心ならば仕入物のような信心じゃ。金剛堅固の白道は、いかにも人生の水火のために蔽はれることはあつても、心の底には終始変りなく、未まで通つて遂に西の岸まで達しておるのである。一分一分病苦は増す、一息一息体力は衰える。而して信心のことは確然としたままで、少しも變らず遂に寂靜無為の境に入るのである。「涅槃の城には信を以て能入とする」という言は、初めて身に浸みていただけだ。『煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相廻向の心行を得ればすなわちその時に大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するが故に、必ず減度に至る』といえるのだらかなる連続がよく味へた。臨終という時に、別段際だつて気をととり直す必要はない。平生業成の一念の信は、一生の間継続して、自分では計らわざれど、所謂自然の強縁にひ

かれて、人生の日暮れが来ると同時に、減度涅槃の星が輝いてくるのである。

信心ある人の臨終を見るときは、減度とか寂滅とかいえる言はいかにも適切である。されどその減なるものは、絶滅するの意味でなくて、却つて永久自由の境に入り、所謂諸根悦豫の樂しき域に遊ぶのであることは、この度親しく実験によつていかにもよくわかつた。実にこれ「常樂の妙境」であつて、仏が涅槃に入り給うとき、悲しめる弟子方に対して「如来は常住にして變易あることなし」と教え給いたる靈域が、歴々として見ゆる心地がした。

「必ず減度にいたれば即ち是れ常樂なり。常樂は即ち是れ畢竟寂滅なり。寂滅は即ち是れ無上涅槃なり。無上涅槃は即ち是れ無為法身なり。無為法身は即ち是れ真相なり。真相は即ち是れ法性なり。法性は即ち是れ真如なり。真如は即ち是れ一如なり。然れば、弥陀如来は如より来生して報・応・化種々の身を示現したまふ」という繰返しの御言が、一々活きて味わうことが出来るようになった。

『浄土論』に描かれてある浄土莊嚴の有様は、この度こそ目に見るようになって来た。阿弥陀法王の善き力によつて住持せられたる寂靜無為の浄土の大なる御親の下に、如来浄華衆たる眷屬莊嚴の方々が、正覺の華より化生し給う様子が見える心地がする。わが父

の如きも今やこの莊嚴の仲間入りをして、善友相見えて、極みなく喜んで居たまうかと思つと、実に心の中が淋しき中にも非常に満足である。その浄土に生れらるるや、所謂「無生の生」で、目が醒めてみれば、昔ながらの悟りの限りなき世界であつたことを、味おつて居らるることであらう。殊に『五功德門』の譬喩などは、たしかに浄土穢土の間を出入した経験のある人でなければ、とても説くことの出来ぬ境たることがわかつた。

私は二十年来他に遊んでおりましたが、今になっては、毎年必ず国に帰省した時の感じを想い起こさざるを得ない。汽車が生国の境に入る。山水は皆旧知己である。行き過ぎる村々まで幼少の時に遊んだ歴史中のものである。かく一歩々々漸次に故郷に近づく、遙かに我が村が見える。わが家の松が見える、次に屋根が見える。近門の味はここじや。人生にて法を聞き一歩々々浄土に近づくも、かくの如くである。

かく近づき来れば既に田にある農夫、道に遊べる子供までが帰つて来たまいと迎いに来る。何時の間にやら我が故郷の人たる大会衆門、正定聚の仲間入りをする。かくなればもう帰つたも同様、足の進むに従ひ自然に我が家の門まで来る。さていよ／＼我が家の闕を跨いで、待ちかねたまえる父母の膝下に「唯今帰つて参りました」と

頭をさげ、頭をあげれば兄弟は側に在り、旧知己も集つて
いる。一家団欒やれ／＼と心を安らかにし、気を落着けて、
いつも仏祖の冥助に感泣したことがあつた。今は我が父も
その如く蓮華蔵世界に入りて、真如法性の身を証り待ち兼
ねたまえる本師法王に見え、眷属莊嚴の中に加わつて、修
行安心の宅に安住し給える宅門の味は、二十年來、我が度
々この生において帰省した味と同様ならむと思へば、たし
かに自分も半分だけは父上に伴いてその境にある心持がす
る。

さてそれから座敷へ通る。母上の用意し給えるご馳走、
誰某が呉れた果物、帰るまでと貯えて下さつた珍物など、
旅の話と故郷の話と語を交えつつ味わう有様は、これぞた
しかに修行所居の屋寓に入りて仏法の味を愛樂し、禪三昧
を食として法味樂に満足する屋門の有様である。かく満腹
し終れば、庭木やら花園の間でも散歩でもしようかと父子
相携え、母も弟も共に徘徊する有様こそ、実に菌林遊戯
地門の真趣味である。

菌林遊戯地門というは、如何にも適切な譬喩である。
論に曰く、「大慈悲を以て一切苦悩の衆生を觀察して、応
化の身を示し、生死の菌、煩惱の林の中に廻入して、神通
に遊戯して教化地に至る。本願力の廻向を以ての故にこれ
を出第五門と名づく」と。誰も何気なく読みつつある文な

還来し給うことと思へば、親の慈悲の極みなぎに感泣する
と同時に、もと／＼如來の御親が我が親を出迎へ給ひし
みならず、菌林遊戯地門の衆生濟度の徳まで授け給ひたる
周到なる根本的大慈悲に渴仰する次第である。

ここに至つて、親鸞聖人がこの菌林遊戯地門に重きを置
き給ひて、仏陀が我々の上に下し給う救済の一半であると
示し給ひたるは、中々深き味あることである。『教行信証』
開卷に「謹んで浄土真宗を按ずるに二種の廻向あり。一に
は往相、二には還相なり。往相の廻向に就いて真実の教行
信証あり」と宣へるをみてわかる。私の如き從來還相廻
向なるものを左程重大なることと思はず、有体に告白する
に、真実証文類の付物位に考えておつたが、これは大なる
誤りであつた。親鸞聖人の如きは晩年になるに従つて、こ
の辺に重きを置き給ひしものと見えて、特に『入出一門偈』
なるものを作りて、浄土に入ることと、穢土に出でくるこ
とと對等に並べて何れも仏陀の廻向なりと喜び給うた。私
の如き從來前半世に於ては、父が浄土に往生せらるる始終、
即ち平生業成の信心から遂に涅槃の妙果に達せらるる最後
まで、信仰の鑑であつたが、今ではもはや親しく接するこ
とが出来ぬゆゑに、唯々穢土に還来して普賢の徳を修し給
うことを後半生の理想とするより外はない。和讃に

観音勢至もろともに、慈光世界を照耀し

れども、実に深き趣のある教えである。「応化身を示現す
ることは、あたかも法華經の普門品に説ける三十三身の如
し」と曇鸞大師は註せられた。又願文には、普賢の徳を修
習せんと誓つてある。普賢行願讚なる經文の意義を味わう
にあたかも弥陀の願意と同様である。そも／＼『普賢行願
讚』は、『文殊師利發願經』と同本異訳にして、その意味は
左の如くである。

曰く、身口意の三業を清淨にして十方の諸仏如來を供養
し、三世の菩薩と共にあらゆる衆生海を濟度し、殊に文
殊師利は智慧を以て普賢の行願と相伴いて多くの仏子を
誘ひ、命終の時、無量壽仏の宮に生じて、親しく阿弥陀
仏に見え奉らんとの意味である。

かく考え来らば、諸經中にある諸仏、菩薩は、我々を引
接するための方便である。してみれば、我々人生なるもの
は如何なる所に、如何なる仏の示現があるやらわからぬ次
第である。親鸞聖人が聖徳太子の上に觀音の慈悲を仰ぎ、
法然上人を以て勢至菩薩の智慧の化現と見給ひし如きは、
たしかにこれが事實的證明である。「ほろ／＼と鳴く山鳥
の声きけば、父かと思ふ母かと思ふ」。我々一生の間に
生れかわり死にかわり、仏が私を救ひ給ふことの深きこと
は、到底測るべからざることである。亡くなられた親が我
を導かんとして、樂しき浄土に安んぜずして、再び穢國に

有縁を度してしばらくも、休息あることなかりけり

安樂浄土にいたるひと、五濁惡世にかへりては

釈迦牟尼仏のごとくにて、利益衆生はきはまなし

とあるは、今は人ごとならず、よく我が身の上に蒙る慈
光なり、とよろこびに堪えぬ次第である。

親鸞聖人が「我二菩薩の引導に順じて如來の本願を弘む
るに在り」と宣へる感謝は、よく／＼身にこたえて感涙に
堪えぬ。幸に宿縁深くして、かく行信に遇い奉りたる以上
は、もうこの世の望みはこの大御親の慈悲を一人にても伝
える常行大悲の徳に従つて生活するより外はない。かく生
活せば、我一人おらは二人、二人おらは三人と、必ずわが
父も影の如くに我々の身に添ひ給うことは疑われぬ次第で
ある。されどこの世における間は、凡夫は飽くまで凡夫であ
る。思う存分に御慈悲を伝えるなどは仲々思いもよらぬこ
とである。むしろ、我等も遂には正覺の華中に化生して、
本師法王の大御親と、眷属莊嚴中の我が親に遇い奉り、再
び手を携へ親しくこの世界の菌林に遊戯すること、和歌の
浦の片雄波のよせかけ／＼返らんが如く、心ゆくばかりに
衆生濟度をさせて下さることと思へば、唯々仏意の極りな
きに仰歎し奉るの外はない。

(明治三十七年五月稿)

共に是れ凡夫なるのみ

白井成允

聖徳太子憲章十条

忿を絶ち瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ、人には皆心あり、心には各執れることあり。彼れはみすれば我は非みし、我れはみすれば則ち彼れは非みす。我れ必ず聖なるに非ず、彼れ必ず愚なるに非ず。共に是れ凡夫のみ。是みし非みするの理、詎んぞ能く定む可き。相共に賢く愚かなること環の端無きが如し。是を以て、彼の人は瞋ると雖も還りて我が失を恐る、我れ独り得たりと雖も、衆に従ひ同じうして挙ふ

この条のような教が千三百年の昔に、私共の祖先に示されているということは驚くべきことだと思ふのです。私は現代の世界の指導者と云われる方々にこの太子様の教が分つて頂ければ、こんなに争いを続けるという事態は無くならであらうと思ふのです。ところがこの第十条のような考え方は西洋には無いと云つていいので、それが今の人類の

合は腹を立て怒つてはならない、それでその理由を次に詳しく述べて下さる。

「人には心あり、心には各執るところあり」執と言う字は執着ということで、我々の心には皆何かの執着がある。これは家庭でも世間でも世界でも、皆それの無い処は無い。民主主義でも自由の原理がよいのだと、又、社会主義の国は統制の原理がよいのだと、皆主義や主張を持つている。だから異つた主義主張の間に争いが起こる。それで「彼れはみすれば則ち我れは非みす」、向うでよしとする処を私の方は悪いとし、私の方でよししても向うの人は悪いと言ふ。これは同じ人間の組織でありながら自由主義がいいと言ふ、統制主義がいいと云ふ。同じ日本人でありながら自民党のよしとする処と社会党のそれとは喰い違つている。人間の世の中にはいつもこういうことが出て参ります。そういう主張を異にする本の心を考えてみると、自分は何か物の道理がわかり、賢い判断を下しているのに、相手がさつぱり理がわからん、愚かな気狂いの様な奴だと、そんなふうな考えが根本に流れている。西洋の考え方で言えば、我れは神の陣営に属する、汝は悪魔の陣営に属する、それは西洋の宗教が神と悪魔との戦いを原理としているのですから、悪魔の陣営に属する者を征服して神の陣営に入れなければならぬという立場が西洋の宗教に始終出て参ります

禍いの源であると私は思います。

この条のお言葉は分り易いようですが、私共のいかりの煩惱をいかに処理したらよいかという誠めです。怒りということが世間に禍いを起してくる本になるので、「和」の理想を掲げたこの憲法において、努ること勿れというこの条の教えは、和ということの逆の理念の方から、如何にして人は和を実現できるか、それを反省せしめて下さる教えであります。

始めに「忿を絶ち瞋を棄て」という言葉がありますが、平安朝の学者が忿という字に「こころのいかり」、瞋は、「おもてのいかり」という読みをつけて下さるのです。「心が外に現われる、怒る勿れと誠めて下さるのです。「人の違ふを怒らざれ」と。怒りということを考えてみますと、人の考えが自分の考えと違つている。相手の主張が自分と異つているところに怒りが出てくる。だから相手の人が自分の考えと違つた事を考え主張し行つてゐる。そういう場

から、こういう是非善悪の争いが起つてくるのです。

然し自分の方が聖で、よく物の道理がわかつた者、向うは愚かで、物の道理がわからんというのでなくて、我れも彼れも共に凡夫なるのみ、この「共に是れ凡夫」という言葉は非常に重要なお言葉で、聖でもなく愚か者と定めてしまえる者でもなく、どちらも共に平凡な人間に過ぎないという自覚ですね。そう言えば何でもない事のように思われますが、実は凡夫だと知るのには容易ならざる事で、誰でも自分の主義主張に執着するところに自分をひとかどの偉い者だとうぬぼれている。それが砕けなければ自ら凡夫だとは知られてはこない。一度己れが凡夫なることに気がついた以上は、そこに始めて凡夫の分際として、これが絶対的に善いのだ、これが絶対的に悪いんだと定める智慧はないと知れる。そんな智慧は仏様において始めてあるのであります。しかしその仏様の智慧は、私共の善悪相対的な判断とは異つて、如何なる悪をも必ず転じて善と成す絶対的の智慧が仏様にははたらいておいでになる。如何なる悪をも、それを転じて善ならしむる智慧が仏様の智慧で、私共凡夫では計らい得ないところである。太子様は共に是れ凡夫のみと仰せられたが、親鸞聖人は凡夫というのは、欲を起したり、愚痴をこぼしたり高ぶつたり、ねたみそねんだりする心が命終るまで離れないと云つて居られます。

だから「相共に賢愚なること環の端なきが如し」、環はミミガネと訓ませてきました。字書にはユビワともあります。耳を飾るにしても指を飾るにしても、すべて輪でありますから、どこを端としてつかむことは出来ない。これは善であるところ／＼と輪を廻して行くと、そこが悪になつてしまふ。悪であると思つて輪を廻して行くと、そこが善になつてしまふ。そういうとりとめのないのが人間の執着する善悪であると教えて下さる。然しそういうことだけ言つていると、例えば第九条に「信は是れ義の本なり」という、義という人の行う筋道ということが曖昧になります。然しそれは如来の眞実を頂くところにおのずから善悪のすじ道が知られてくるのであつて、私共の自分を中心にした計らいの中に、善とか悪とか云つている自己中心のとりとめもないことだということをご言つて下さるのです。この事はこの頃労働争議などの時にきまつて相手が誠意を示さない限りたたかひ抜くのなどと云いますが、あの誠意という言葉の使い方の中に如何にもよく現われているようです。自分の方の要求を絶対にししいものと決定しておいて、対手がこれに従わなければすぐ誠意が無いのだと云う。ずいぶん我が儘勝手な主張ではありませんか。「是を以て、彼の人瞞ると雖も還りて我が失を恐る」向の人が自分に腹を立て怒つて来た時に、すぐに腹を立て怒り

くということになりましょう。

ところが太子様の御生涯を仰ぎますと、国内においても国外においても日本国の非常に困難な時代に、悪くすると国が二分してしまつて国が乱れざるを得ない。そういう時勢にこういう憲法を作り、「和」という理想を掲げ、仏様の教に依つて日本民族の精神的基礎を永遠に定めて下さつた。これによつてあの時代の日本国は救われました。そして太子様が亡くなられて僅か百年の間に、日本は国家としての体勢を整え、国の法律を制定し、国の歴史を作り、横と豎と、時間的にも空間的にも日本を統一せしむることができたから、天平の文化、特に万葉集等を産み出している。このように国家が一つになつて興隆して行く基礎を作られた太子様ですから、御自身の節操もなく、民衆の言うなりになつて流れて行くということではないのだと思います。

それでは「衆に従い同じうしておこなふ」とはどういうことかと云えば、私はここに大乘の菩薩の同事の行ということに通じます。同事とは事を同じうする。菩薩は人を救うためにその人に同ずるといふ。同ずるとは一緒になる、医師が病人と共に喜び、共に悲しむといふ処に菩薩の同事の行が現われてきます。で私は第十条のこの同といふのは、そういう意味だと思ふのです。民衆の喜びを喜びとし、悲しみを悲しみとし、難儀を難儀として衆に従つて同じうし

返すといふことをしないで、あの人があんなに腹を立てたのは、こちらに何か間違いがあつたのではなからうかと反省して行く、こういう心があつたら個人間のことでも、国と国の間でも争いの大部分は無くなつてしまふ。但だこの態度は云うは易く行ふは難しと申さねばなりませんまいし、如何にしてこういう態度に出られるであろうか、私共にとつて大きい問題でありましょう。

次に「我れ独り得たりと雖も、衆に従ひ同じうしておこなふ」これはどういうことか。先ず我れ独り得たりということですが、昔中国で屈原という人が、世間尽く濁つて我れ独り清しと言つて怒り、河に身を投じて死んだという話があります。又世の中は皆理の分らん者ばかりだと云つて世を棄てるという事もしばしばあります。そこで我れ独り得たりと云うことから色々な態度が出て参りますが、己をいさぎよくして世と別れて清く保とうとする。そう云うことが始終所謂清い人々の間に現われて来ますが、太子はそうでなくて、我れ独り得たりと雖も多くの人々に従つて「同じうして」これは「同じく」と読んでいますが、それは太子様の仰言るところがはつきりしませんから「同じうして」と読みます。その意味は「従衆同拳」を皆の云う通りに一緒になつて行くと読みますと、自分の主義、節操といふものをすててしまつて民衆の言うなりに動いて行

て政治を執つてゆくところに政治家としての根本原理があるのです。それは我れ独り得たりという、自分が物の道理が分つているから、お前達は自分の言う通りにしなければいけないという指導者ふうに言うのでなしに、間違い誤つて考えている人々の行いの中に入つて行つて、その人々の内側からその人々に同情し同感しながら種々の方便を以てその人々を正しい道に導いて行くというのが菩薩の同事の行でありますから、「従衆同拳」といいますのは、そういう同ずる心持である。こういうふうには読みますと、この第十条の意味がはつきりすると思ふのです。

これは、この頃の日本人の言う言葉に、何か事があると、絶対に反対、絶対といふことばを使わないとじつとしていられないようですが、「共に是れ凡夫のみ」といふ言葉の意味をみますと、貴君の考えと私の考えは可成り違つていますが、共に凡夫だから共に相談し合つてよい智慧を出しましょうといふところに、民主主義の根本原理が行われると思ふのです。ですから第十条のお言葉は今の時代に皆が省みて頂くべき尊いお言葉だと思います。

今の時代は皆が偉い人、正しい人ばかりになつて角突き合せている時代で、片一方では、我れは神の陣営に属する、我が主張に反する者は悪魔の輩だからこれに戦い勝たなければいけないと言つて動いていけると、片一方では何か

それに対して、神なんか有るものと神を否定し、唯物あるのみと、唯物史観の立場を絶対真理として、人類全体がこれに従わなければいけない、俺がそれに従わせてやるんだと、そんな、我れ絶対の真理をつかんでいるという傲慢な執着、その執着と執着との角突き合いのようです。そこに共には凡夫のみという尊い教え、それは大乘仏教の根本原理である空するところに、世間を救う菩薩のはたらきが出てまいりますので、これに似たことが太子様の『勝鬘經義疏』の中に、菩薩は「衆流に冥合して敢て異趣なし」と、諸々の人々の諸々の考えに入りこんで、民衆が迷つていれば、その迷つていることに自分が融け込んで行つて、民衆の迷うその道理をよく知り尽して、その迷いを転じて証りの道に歩ましめるといふことが出てきます。

或は『維摩經義疏』の中に「己よくすと雖も然も世に異りて自ら異とすることなし」とありますが、これは従衆同拳ということをよく説明し得る言葉です。自分がよく出来るからと云つて、世間から抜け出て自分だけ異つた事をし得意とする事は菩薩にはないのでありましょう。

ともかくこの第十条は、怒りの心を鎮めしめる条であります、その根拠として深く人心の機微に徹り入ると共に博くあらゆる人々に同情する広大な意味を有し、如何にも善く仏心に住して民衆に臨みたもうた菩薩太子の御言葉た

耳の底にのこるもの

一、私は石ころ

私が初めて仏のお慈悲に驚いたのは、「石ころの私が憐れだと拾い上げて運んで下さる」とのお言葉にびっくりしたのである。

それはもう五十年前も前のことであるが、思えば常音先生のおっしゃって下された、そのお言葉が今も耳の底に聞えて来るのである。たしか二十七歳のお益の十六日であった。あの古い求道学舎の、先生のお部屋であった。

私が長い間、人間の光とし、求めていた信仰が、とても判る望みがなくなり、絶望においつめられ、又人生生活の上で、同僚間全くの孤独に陥り、行き先が真つ闇になり、居たたまれず、べそをかきかき常音先生の所へ行つたのである。その時私に云つて下さつたお言葉である。

先ず私は自身が絶望に立ち到つたことを申した。

「だん／＼判ると思つた信仰は、右も高い煉瓦塀、左も同じその先、左右の壁の合した隅に追い詰められ、とうと

るを思わしめまします。同時に此の如き言葉は世界の文献の中に稀にしか見られない貴い言葉として度しみ聞かるべきものでありましょう。

私共は千三百年の昔から既にこの言葉を頂いていた、私共の祖先の創りて遺し伝えられた文化の精髓にはこの貴い教を生んだ精神が流れています。これ真に人類に永遠の平和をもたらすべき不滅の光であります。

還相

筑紫野春草

去りにしを追ふも末練と自らに言ひ聞かせ居り暗恒として

縁あればあるひは来りあるは去る吾がみ聖の言のよろし

も
み聖の深きみさとしひびけども烏潜のわが身のなぐさま
なくに

徒らに名利めきたるわが法衣 花やかにしてころまづ
しき

柳 瀬 留 治

う信仰どころか、行手が絶望になりました。それに人生上、全く孤独になり、居場所さえなくなりました。」

と訴えました。先生は

「如何にも君は困つたであろう。いよいよそうなると困るであろう。すでに兄常観が、求道学舎を起し、人生に行き悩む者、行き場のない人の世界がここにあるぞ、直ちに来いと待ちもっているのだ。道を失い、くら闇に陥つたものが憐れだ、可愛想だ。この仏の心一つにより念仏を唱えよと云っているのだ。法然聖人、親鸞聖人をはじめこの慈悲一つに生死を打ち任せられ、今現にわしも兄貴もこの仏の御憐れみに生命を托しているのではないか。君もこの慈悲一つに打ち任せて何の遺憾はないではないか。」

と懇ろに説いて下さるのであった。所が私は相変らず「私には判りません」と答えるのである。先生は

「判らずともわしの言うことが聞えるのであろうが」と仰言る。私は、

「聞えませんか」

と申すのである。先生は

「わしの言う言葉の音波だけは聞えるだろう」と仰言る

「お言葉は聞えますが、お慈悲が聞えません。聞其名号と申しませう。その心が聞えないのです」

と申しました。それで先生は

「君はそういう尊いことが聞える耳だと今日まで思っていたのであろうが、言葉だけしか聞えない耳なんだよ。我々の耳はそれが聞えるだけなんだ。君の耳にはわしの言う音波だけはたしかに聞えるなあ」

この一言！生れてはじめて聞いたのである。初めて自分の分際に目が覚め、不思議なお声が聞えたのである。先生は静かに

「君は今日まで特別なことが聞える耳だと思っていたのだ。それが迷いなんだ。言葉しか聞えない分際なんだ。何か特別な意味の聞えるのと思ひ、聞えませんが、判りませんで果てるのだ」

と言われたのであった。誠にそうであったと思うが、とても判りましたとは申せず、又先生を払い退けて逃げようとし、

「でも先生、そうお聞きしましたが、信じる心も起きませず有難いという心も起りません。私の心は石みたよう

に固く化石していて信じることも喜ぶことも出来ません」と申しました。先生は、

「そうであろう。君の心は石なんだ。化石して自由を失い、信じることも、喜ぶことも出来ない。それが石だよ」

「君を石だと見て取った仏は、石である君に、感覚も意識も持たぬ石に、信じることも、感謝も出来ぬことは元々御承知の上のことなんだ。石を石と見て取った仏は、その自由が利かず、動けない石が、路傍で踏まれ、蹴られて果てて行くのが憐れで、可愛想で、してみようがないので、拾いあげてウンウン運んで下さるのだ。有難いではないか……否、石ころの君なんだから有難いなど思えないんだ」

「先生、その運んで下さることも、無感覚な私には意識されないうです」

と申すと、先生は、

「君は石なので無感覚で判らないのだ、君は石で知らんている。その知らんている者を、何処々々までも運んで下さる。どうだ、憐れんどどこ／＼までも運んで下されば安心ではないか。頼まれもせぬものをなあ」

と云い終り、先生は膝のお手に合掌をくみ、口の中でお念仏唱えながら、静かに私を見守っていられるのであった。誠に重くて動けぬ石、それを憐れみ、抱き上げて下さる。

「先生、何とも不思議なことですね。私は転じて動けぬ

つままれたようであった。

誠に、信じも喜びも出来ぬ「石ころ」の私である。「唯念仏」に運ばれてゆくだけである。

二、噛みごたえのない粥

それからというものは、人生さへざるものがない、広々とした天地に放たれた心地で、この念仏一つあれば、人間一匹自由自在に生きられる。という、生れて初めて青年期の元氣を得たのである。私の二十七歳の夏であった。

この他力念仏の信仰は、易行、実にたやすい道であり、万人が万人、誰もが分る道だと思つた。ただ自分の自力迷妄で立てた方角に固執し、むつかしくしているのだから、その慈悲がとてども意外な大ききで、我々の思惑とは全くのけたはずれなためなのである。

仰いでただ念仏するだけ、何とたやすい仏の本願であるかと、すっかり肩が軽くなり浮いた気になっている中に、自分が冷たい石ころで泣いていたことを忘れてしまったのである。

念仏があまりにもたやす過ぎて、お粥のように歯ごたえなくする／＼と口を通り、どうも噛みしめて味わうということの出来ぬたわいなさ、それに腹に入ってから、飯を食べた後のように腹ごたえがない。

ままです。ね。あまりにもたわやすく夢のようです、何という不思議なことでしょう」

とあつけに取られてしまいました。先生は、

「石が仏に抱き上げられ、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と念仏しながら運ばれて行くのだよ」

と仰言るのであった。私は急に重い石を仏に引き受けられてしまつて、体も心も綿のように軽くふわ／＼になり、縛り解められていた綱が急に切り放つて頂けて「こちらがどう思うと思うまいと向う様は無関係でゆるがぬ」とのお慈悲、何と自由自在なことか。「嬉しいやら、有難いやら夢のようです」永い間「どうも私には判りません」と払いのけていた私は、始めて有難うございましたと御礼を申せたのである。

それから私は先生にお暇して、多分歩いて巢鴨に帰ったことと思うが、足が地面を踏んでいるのか、宙を歩いているのか、夢心地だった。何と不思議なことであろう。

「こんな不思議なことがこの世にあることか。本当に不思議なことだ」とつぶやいて歩いていたことを覚えていた。今までが狭い世界に思っていたが、今は何のさへざるものもなく、凡てのものが生き／＼と輝いているのである。

「このお慈悲一つある以上、人生何をしても生きて行ける」世界に怖いものなしになり、不思議で不思議で、狐に

何だか物足りない、という心持ちになったのである。元々私は信仰一つで人生に立つ腹が出来ることばかり思い込んでいたのである。それにどうも信仰というものでなく、何だか無信仰のようなのである。

さて、また間違ったのであろうと思ひ、常音先生の許に伺いに行ったのである。そして「お聞かせ頂いた念仏が、噛みごたえのないこと、腹だもちのないこと」を申し上げたのである。先生は、

「君はお粥しか喉を通らぬ重病人だ。噛みごたえのあるものはおいしいであろうが、それが食べられない病人なのだ。そのくせに噛みごたえのあるものと思ひ、人生に食べるものがなくなつて飢えて駆け込んだのではないか。固いものの食べたいのは、それは君の迷いなんだ。それで君は久遠劫来、今日まで流転輪廻を続けて来たのだ。君そんなに念仏のお粥が物足らぬなら止めてはどうか」

と申されるのだった。贅沢いなら元の通りの御破算にしよう、と仰言るのであった。

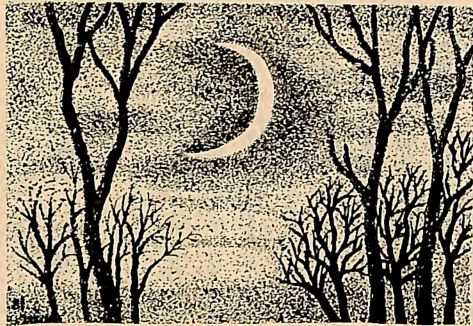
私はびっくりした。私はよい気になつて、病人だったことを忘れてしまったのである。念仏のお粥が食べるにたやす過ぎるなど先生に甘えて申し出た。この念仏のましまさずば、心は真暗な闇だけなのである。

お粥のほか何物も喉を通らぬ私である。

禪に不徹会というのがある。こちらは不徹である。それに徹して下さるのは仏の慈悲である」

と仰せられたので、今まで徹しようと思つて聞いていた私は、びっくりしたのである。こちらは永久に徹しない石ころである。徹して下さるのは仏の御心一つであつた。又しても、飛んだ心得違いをしては仏の心をさえぎる私なのである。恥じ入り、恐れ入つては念仏する次第である。

『人生随想』より



「まずいだろうが、このお粥を食べて飢を凌いでくれ」とは何という有難い仰せであらう。

縁もゆかりもない路傍の石ころの私に、何という御親切な仏の仰せであらう。

私共の自我、我執の迷妄は、遠い過去から今日に至り根強い習癖となつているのである。又しても心が闇になるのは、自分の暗い心の一方ばかり眺め、本願の不思議を仰がないことだと思ふのである。泥川泥沼のように崩れては底に泥が溜るのである。堪えかねては日曜を待つては常観先生の御講話を聞きに参るのであつた。先生のお口から堰を切つて出る、仏のやるせない清らかな水に、心の泥が押し流されては、晴れ／＼させて頂いて帰ることであつた。

でも又しても思惑の坪で聞こうとするのである。「確り聞こう」とか「心に沁みて有難くお受けしよう」とか自分の「石ころ」であること「泥沼」であることを忘れ、飛んだ所に力瘤を入れて、掴もうとするのである。

或日の講話に先生は、心身徹透ということを説かれ、

「徹底し得ないものに飽くまで徹底して下される仏の御慈悲である。こちらは何処までも不徹底で、冷たい氷を以つて仏をさえぎっている。その我々を、飽くまで照らし融かさずんば止まぬの太陽の光、それは仏である。如何なる氷と雖も、太陽の前では力なく融けて恐れ入るのみである。

こころ

浅原才市

あさましや

わしのこころの かわりめしれぬ

こころかわりの はやいこと

くるくると

ようかわる ようかわる

こんなところが あなたにとられ

ごおんうれしや なむあみだぶつ

○ さいちがこころは そらごとたわごと

まことあることなし

○ ごかいさんが よう知つておられるよの

あさましの わがこころ

なむあみだぶつで みりやわかる

ありがたいの おやのこころを

みるかがみ

みだの かがみで

みりや わかる

青蓮華 (四)

井上善右エ門

天地のきよきまことのすみとほり
なむあみだぶつの声となりぬる

われわれ人間と生れて最も尊い事は何でありましょうか。からだだけの人間は果敢ない存在です。独生独死独去独来の外はありません。しかも無明と我執と煩惱と業とを背負っています。無明とは真実を見ることのできぬ愚かさの闇であり、この闇よりあるべからざる我執の迷いを生じ、我執によつて煩惱を起し、煩惱によつて業をつくり、その業に押し流されて苦惱せざるをえぬのです。ゲートルが『フアウスト』の中で「人間は馬鹿気たちっげな世界に住みながら、それを総てだと思ひ込んでゐる奴だ」と悪魔に嘲らせていますが、まことにそれが人間の實態というものでありましょう。人間は人間の殻に銷されているのです。

こうした人間にとつてたゞ一つ許されてあることは、法を聞くことが出来るということです。それは即ち真実に遇

これより尊いことがあるでありましょうか。

いつくしみみちたらひてぞものみなを
とこてらしめますなむあみだぶつ

南無阿弥陀仏には真如一実の純粹清淨の至心が輝き、この至心を体として未徹つた大悲の「いつくしみ」が満ちあふれています。この如来の大悲心に触れて融かされない苦悩も煩惱も疑心もないのです。この広大の大悲を仰いで聖人は「満足大悲円融無碍」と讃じられました。如来の大悲真実がわれわれの心を満ち足らわさせて信海となるのです。「いつくしみみちたらひてぞ」とは、まさにそのこゝろを詠嘆されているのであります。

真如にそなわる磐石の至徳と大悲と満足とが南無阿弥陀仏を聞きまつる一切衆生たる「ものみな」の魂を「常てらし」てましますものそれが「なむあみだぶつ」であります。「如来、苦悩の群生海を悲憐して無碍広大の淨心を以て諸有海に廻施したまへり」と申された聖人の御言葉が胸に沁みます。「いまははや語らんとして言葉なし 御名を称えて問いつ答えつ」とうたうた人の心もふかぐくと惚ばれます。

みほとけのみ誓ひ成れり罪業の

う道が開かれているということです。人間は銷くされていますが真実は実に開かれています。開かれているということは、真実がこの私のいのちと一つに融けて、この私を撰せんめ取る働きを止めぬということです。それが即ち如来の「昭喚の聲」となつて今この私に來り響こひているのです。

親鸞聖人はその事実を次のように語り明して下さっています。

一如宝海より形をあらわし法蔵菩薩となりたまいて 無碍の誓いをおこしたまうをたねとして阿弥陀仏となりたまう(一多証文)

宇宙永遠の眞実たる真如の世界が、この私を撰取して捨てたまわぬ妙なる働きの御姿こそ南無阿弥陀仏であります。まことに「天地のきよきまこと」がその「すみとほる」極まりとして「なむあみだぶつの聲」となつて今この私の前にたち現われて下さつて居るのです。人と生れて南無阿弥陀仏に遇い、永遠の眞実に通ういのちを得しめられること

荒野の暗路照り映ゆる見ゆ

南無阿弥陀仏の眞実に遇い心足らうところ、今までの罪業の荒野の暗路はそのみ光に照らされて、煩惱罪業のま、におうけなくも照り映える奇しきわが路となるのです。

よるところを知らず荒野にさ迷う人生は悲しくも淋しいものです。それを自らつゝみ隠して人間のはからいで処置できるものかのごとく右往左往を繰返してきたのですが、迷いの人生の本質というものは、遂にこれを隠しお、せるものではありません。思えば思うほど、顧みれば顧みるほど荒野の暗路は果しなく淋しいものです。然るに何といふ不思議でしょう、その荒野に一条の光が暁天の旭日のごとくふりそ、いで下さつたのです。南無阿弥陀仏の招喚のみ声はそのま、如来の光です。荒野は転じてその光に映ゆる路となりました。これまさに「みほとけのみ誓ひ成就」のあかしであり現われであります。われわれの業道はこの誓いに貫かれています。業道を行くもの、勇みはここに開かれます。そのこゝろはそのま、次の一首にうかがわれるのです。

あさましきわがこしかたはみほとけの
しらせたまへばなにをなげかん

罪業は常に愚痴の暗雲と結び合つて身をさいなみます。

南無阿弥陀仏のみ光はその暗雲を払って下さるのです。「みほとけ」が何もかも「しらせたまうて」ましますとき「なにをなげかん」と総てを仏心のみ胸に投げ入れて安らわせて下さるのです。そこに自ずから南無阿弥陀仏の寂けさと輝きがこの罪業の身を包んで下さるのです。

重荷をおろして人生の旅路にいそしみましょう。生きてあるかぎりこの世は波うつ海原です。波のない平安を人生に願うのは人間のはかない夢であります。若き日も、老いたる日も波間を越えてゆくのがこの人生というものです。歌人窪田空穂氏の「老いぬれば心のどかにあり得んと、思ひたりけりあやまりなりき」の一首を老境に入った私はしみぐと噛みしめています。



梁塵秘抄

不軽大士品

不軽大士のかまへには逃るる人こそ無かりけれ。誹る縁をも縁として、逐には仏になしたまふ

○

弥陀の誓ぞたのもしき、十悪五逆の人なれど、ひとたび御名を稱ふれば来迎引接疑はず

阿弥陀仏の誓願ぞかへすかへすもたのもしき、一度御名を稱ふれば、仏になるとぞ説きたまふ

極楽の歌

極楽浄土のめでたきは、一つもあだなることぞなき、吹く風、立つ浪、鳥もみな、妙なる法をぞ唱ふなる

信解品

長者は我が子の愛しさに、瓔珞衣を脱ぎすてて、あやしき姿になりてこそ漸く近づきたまひしか

窮児の譬ぞあはれなる、親を離れて五十年、萬の国に誘はれて、草の庵にとどまれば

慈光日誌抄

— 秋 彼岸 —

九月四日(日) 山陰・浜田市郊外の旧国分寺の跡なる金蔵寺(朝枝実彬師)に久々にお参りし、ご法話をさせていだく。江津の能美温月師ご夫妻その他、お寺さまも数名ご参指くださって有難いことでありました。

金蔵寺のご本尊は、木像ではなく、聖人ご真筆のお六字を金属板に写し刻んだ南無阿弥陀仏のお名号で、殊にありがたい。

金蔵寺さまで感じることは、ご門徒への教化のゆき届いていること。それは一に朝枝先生の身についた御信心の然らしめるものであろうが、一つには、あの控えめの、いつもにこやかな老坊守さまのお蔭。また生一本な真面目な令息夫妻が実質上の住職として、よく活動しておられることによるに違いない。ともあれ、よき師をもつことが大事とあらためて思う。なお、フランスの特異な、深い思想家のテイヤール・ド・シャルダンの全集が書架にずらりと並ん

西元宗助

でいるのには驚く。

帰りは、岩田アサオ女史の美しいお嬢さま運転のクルマで、親子して送ってくださる。よいおむこさん、見つかるようにと念じながら、お別れする。

○

秋のお彼岸は、わたしにとって、殊に感慨が深い。今から満三十四年前の九月二十一日に、シベリヤから舞鶴に着き、「生と死の境いを越えて萩の花」と、詠んだのであるから。

今年のお彼岸の中日は、午前は龍谷大学大宮学舎の旧本館の講堂で、龍谷大学宗教教育部主催、京都女子大学宗学部後援の講演会。学生から私に与えられたテーマは、「真宗との出会い」でありましたが、ほんとうに真剣な楽しい会でありました。終了後、委員と私たちは、女子学生手製のおにぎりのご馳走をいただく、そのおいしかったこと。

辞去しようとする、玄関まで、みんな総出で見送って
くれる。さらに正門で振り返ると、傍にいた学生たちも、
「先生、さようなら」七条通りに出ようとすると、委員
の学生、「タクシーを拾ってきました」と、なにか胸がジ
ーンとなった。

○
久々に無相さんの『念仏詩抄』をひもどく。ハッと感じ
思うほどに有難い。珠玉の詩が、ここにも、あそこにも。
いままで、どうして見過ごしていたのであろうか。

信行両座

コレコレ おまえは
行の座か—

コレコレ おまえは
信の座か—

イエイエ わたしは
願の座に—

この詩の意味は実に深い。「信の座」とお答えにならず

お顔を見せてくださる。またロスアンゼルスの清水しげる
老夫人（九十才）と万里さんたちが、お東の第三回世界仏
教大会参加のため入洛される。

○
もうこの世では会えないものと覚悟し、半分あきらめて
いた清水老夫人と、両手で握手したときは、感激というか
涙以上。家内ともども歓談。老夫人は、いきなり「名古屋
の花田先生のお具合は、いかがおありでしょう。ひと目でも
お会いしたい。」とおっしゃる。なお清水老夫人は、ロス
アンゼルスの加州大学の元東洋学部長・足利譲正博士（仏
教学の権威）夫人の母堂で、『慈光』誌創刊当時からの愛
読者。ご自宅で家庭法話会をも催しておられ、お西の開教
使先生も、たいてい御厄介になつていられる。

○ ○

以上、ここまで書いたところに、わが無相さんから、こ
れは全くの以心伝心というか、感応道交というべきか、右
の「信行両座」の詩が生まれたいきさつについて、さらに
問いあわせ中であつた「法蔵さま」の詩についての、ご返
事のお手紙をいただく。

今は、次の号に間にあうよう、この拙稿を送附しなけれ
ばならぬのと、今一つ、グランドホテルの清水夫人に、ど
うしてもお会いしたいので、このペンをおくことにする。
そして無相さんのお手紙は清書して、できれば次の本誌に

に「願の座」と。われら徹頭徹尾、不信のものにおいては、
ただ本願念仏に生かされるほかはない。願に生き、願に
生かされることによつて、はじめて自ら他力廻向の信の座
に、したがつて又、行の座にあらしめられるのである。よ
つて曾我量深師も、「信に死して願に生きよ」と。而して
「願に生きる」とは、本願念仏に生かされること、すなわ
ち、ただ南無阿弥陀仏ということに外ならぬ。それを他力
廻向の信というのと、これわが信嘗しんじやうでございます。ともあれ、
わが無相さんの信境は、もう秘境という他はない。そうい
えば、次の「法蔵さま」の詩は、殊に有難い。

涙には
涙にやどる
ほとけあり

そのみほとけを
法蔵という

○
わたしはただ南無阿弥陀仏と讃嘆するばかりでございま
す。

アメリカのサンタ・バーバラから、宮地廓慧兄が元気な

掲載させていただくことにいたしました。なお無相翁のお手
紙の終りに次の一句が。

秋彼岸 ただ念仏のほかはなく

蓮月尼
野に山にうかれ／＼てかへるさを 寝屋までおくる秋
の夜の月

植松茂岳
「秋月勝春花」
月見つ、かへる家路におもふかな 花は人をもおくら
ざりけり

一蓮院師
世の中の常なきことの知らるるは、まことの道に入る
始めなり

久遠の友

花田正夫

一、友を求めて

私が学生時代に「死の勝利」という小説を読み当時人生の明るい表面だけを見ていた私に大きなショックをうけた。それは相愛の二人が、同じベンチに坐り、同じバラの花を眺めているが、顔が異なるように心は別々で、永遠に平行線で交る時は来ない、といった風なものであった。

友遠方より来るまたたのしからずやと云い、旅は道連れ世は情けという俚言のように、友を求めていた私にはこの小説が忘れられぬものとなった。

又無教会主義者の内村牧師の隨筆に「自分は種々な人の世話をしてきたが、立派に成功すると、苦しかった昔を思い出したくないのか離れて行った。また反対に何時までもうだがあがらぬ人は、敷居が高くなったといつて遠のいて行った。ただ共に聖書を読み、道を求め合った友だけが変らぬ交誼を続けている」とあった。これは、当時の私にはよく分らなかつたが、そういうものかな、と思つた。

二、対立関係の至難さ

友にも色々ある。同郷、同窓、趣味、職場等々であるが、多くは利害得失によつて離合集散勝手次第で味気ないことである。真の朋友とは互に心を知り合い、他人の幸福を共に喜び、不幸にあつたと遠慮なく打ち明けて、互に助けを求めて、利害を同じくする友である。

然し實際日常の生活を省みると、五分五分の根性に障げられて、恒久の交りは至難である。譬へば合せ鏡をしようと互に映り合うが、いつも自分が善良な心でおれば相手もそうなってくれるが、相手の出方次第で鬼が出たり蛇が出て、魂別れになってしまう。娘道成寺の話も「道成寺うろこが肌の脱ぎじまい」で相愛の安珍と清姫の別れは、蛇となつて焰を吹きかけるのも他人事ではない。

某教誨師がやつと思給がしたので寺に帰り、亡き父の跡を継いで、種々理想をもつて門徒に接していた。ところが好事魔多しで、夫人が精神病になつて、火を見ると喜びという有様で、油断も隙も出来なくなつた。然し人間には、油断というものはあるもので、或朝子供が歯痛で苦しむので、お茶漬をかきこんで急いで歯科医に行つて間もなく、火事じゃ！と叫ぶ声に驚いて見ると、自坊の方から煙が出ていた。走せつけると本堂も庫裏も焰々と燃えるのを嬉しそうに眺めている妻君を見、それからは自分の家内が赤

私が六十七の頃、故郷の中学で卒業五十周年の会の案内をうけたが、病気で帰れぬままに、記念写真を送つて貰つた。ところが五年間机を並べた友人も五十年も音信不通でいると、顔がさっぱり見分けられぬので、夫々姓名を記して貰つたが、五十年前の面影は浮かんでも、現実の人と結びつかない。離れると疎んじ、遠ざかると忘れる、世の常の鉄則に完全に支配されていることに驚いた。こうした中で共に仏書を読み、聞法し合った友だけは、いつも隣家に住むような親しさが続いているのを見出し、内村氏の述懐を身をもつて体験することが出来た。仏縁に基盤をおいた友情のたしかさに驚いた。

京都の学生時代に、信友の白井寅勇さんが下宿を訪れて「あんたと僕とは性格も境遇も違うから、これから意見の対立をするかも知れないが、兄弟が喧嘩をしても離れられぬように、久遠の御親のもとに手をつないで行けるね」とつぶやいてくれたことも印象深く思い出される。

三、私の失敗

私は父が五十七で亡くなつて、学費に困つていた時、幸にお世話を下さる方があつて、医大に通つていた。処が始めの間は夜目遠目傘の内、互に綺麗に見えていたが、段々と欠点が見えはじめて心の壁が出来た。それもしばらくは逃避していたが遂にそれも出来なくなり、自分の鬼心をおさめようと色々努めたが、失敗の連続であつた。しいには恩人を恨むようになった。これでは事と次第ではどういふ破目におちるか分らなくなり、進むことも退くことも出来なくなつた時、かねて聞かせて頂いていた歎異抄の十三章の親鸞聖人の仰せ「さるべき業縁の催せば如何なる振舞もすべし」との一句が身にしみ、煩惱具足の身として、業縁次第ではどういふ業さらしをするかも知れないが、こゝう仰言つて下さる聖人は、どうあるうとも御一緒して下さい、涙の中に手を執つて下さる御慈悲に触れ、ここに真実の知己は聖人でましましたと、思わず「有難いなあ！」と、迷い児が母の懐に帰つたような喜びとやすらぎを恵まれたのであつた。

蓮如上人のお歌に「一人でも行かねばならぬ旅なるを、弥陀にひかれて行くぞ嬉しき」とあるが、何時でも、何処でも、また何をして居ようと、変らず一つ身になって下さる方を恵まれたのである。

然し「小慈悲もなき身にて、有情利益は思ふまじ」と慚愧される聖人が、どうしてこうした深い御理解と慈悲の言葉を申されたかと省みた時、月光の夜空に輝くのは、太陽の光りの返照であるように、聖人御自身が如来の無碍光の照護をおうけになっているそのままを、わが御身にかけて仰せになったのだと改めて知らされた。「法は人によって伝わる」と昔から云われるが、私にとりましては、そうした聖人をおして、如来の「一切衆生の心想中に入り満つ」とある徳光をそのまま渴仰させて戴いているにつけ、よき師、よき人に恵まれたことよと随喜申している。

四、諸先生の信証

近角常観先生は、二十九で信界の人となられての最初の発表に、信仰余瀝の第一頂に宗教的同朋を述べていられる。そこに対人関係においては、決して善に克ち抜けないで、いつも悪に負けて、有縁の人々を悪道におとしている。この浅ましい身を何処々々までも悲憫して下さる仏のおまこと、こちらが悪ければ悪いほど、いよ／＼慈悲を注いで下さり、こちらが反抗すれば涙をもって眺めて下さる。この

ヒルテイの人生論の中で「友情について」という一文がある。要約するに、

一、人生の真実の宝を共同して真剣に追究することを支柱としてしっかりとした友情の基盤を与えられる。

二、友情には人種、職業、財産の違いなどは障りとならないのである。

三、神によって支えられた友情は、生涯を貫ぬいて持続性と祝福をあたえられる。

四、死によっても友情は消されない、死後も情の通いが続くものである。

五、キリストは神を友とした最初の人である。

大略以上のことを述べているが、私が学校を卒えて初めて大連の関東別院に赴任した時、知人が一人も無く淋しさから、友人を求めすることに専念したことがある。その時、歎異抄六章に「親鸞は弟子一人も持たず候」という有名なことばの次に「つくべき縁あればともない、はなるべき縁あればはなることのある云々」とあるが、このように聖人が、離合因縁であるとはつきり仰言るには、離合を越えた不滅のものがあつてのことである。して見れば、無闇に友を求めて淋しさを満たそうとするよりも、離合を越えた仏心を身心の隅々まで信味させて戴くことが大切であつたと気付かされ、事毎に仏心のおまことを讃仰させて頂くこ

全身こめた同情の涙は、唯一滴で五臓六腑にしみわたり、身も心も融かされて感泣し、油然として感謝の念を生じ、自ら頭がさがり慚愧に堪えぬ。このような人は慈悲がこり固まって人となつた方と云う外はない。私はこの友人を持ちながら今までその親切に気付かなかつた、実は仏はこの方である、同心の最大良友であると讃仰して居られる。

又、清沢満之先生は「真の朋友」の題で、相対的根拠に立つ友情は転変して行く。宗教的根拠に立ち、如来の絶対のまことに帰する時、心の闇は破られ、願いが満たされるから独立独歩させて貰えるようになる。ここに友人に対して互に侵したり傷け合うこともなくなる。又相手に求めることもないから、相手を正しく理解するようになる。更に宗教的同朋は求める必要はない。友を求めるのは自分に不足するところがあるから、それを友人によって補うためであるが、仏心に満足する者には友を選ぶことも無用である。世間では善友悪友と分けて自分に利になる人を選ぶので、友人の利用者である。信の上からは善悪・順逆ともに教えられることが多いから選ぶ必要はない。

人が宗教的根拠に立つて満足して、天を怨まず人を求めず、独立独歩して外物、他人に動かされず、仏心に随順して自分の本分を尽すのであると、仰言っている。

五、他山の石

とにつとめようと、念仏にひきもどされた。

六、畢竟 依

次に、医学生時代に、病院でみんなに祝福されて退院する人もあるが、裏門からキンキンの自動車で消えて行く人を多く見た。医師は生きることだけに専念しているが、医学の限界を越えるとお別れとなる。さて一切の人から見放された病人の心の上は何処にあるであろうかと痛切に考えさせられたが、この生死を超えた久遠の友によって、闇が破られることを教えられた。

誌友の一人が、肺ガンの最後の病床から

病める身も弥陀の誓に生かされて、生死の海に夕陽かがやく

という一首をいただいたことがある。

又白杵祖山老師も直腸ガンの病床にあつて

覚悟だに要なきまでに見仏のそだてたまひし恵みたふとし、

さはりなくすべてを照すみひかりは障りある身のうえ

にこそ照れ

と讃仰せられている。

あとがき

月日の流れの早いことに驚かされるこの頃であります。十一月からは、各地で祖師聖人の報恩の集いが賑やかにとりおこなわれることでしょう。「勿体なや祖師は紙子の九十年」の勾仏上人のお歌を思い、我身の恩恵になれた浅ましい姿が知らされますことです。

近角先生の御原稿は、念仏成仏の真消息を御尊父の御逝去を機に、お述べ下さいました。貴重な御記録であります。繰り返し読んで味読させて頂きましょう。

白井先生は聖徳太子の御徳を生涯随喜讃仰して下さいましたが、今回は太子憲章の第十条の有名なおしえ「共是凡夫耳」を御身にかけお教え下さいましたものであります。煩惱まる出しの私共は、「我是他非」の慢心に支配せられて、我身を省みません、そして互に争い合っやみません。太子の時代ことに閻族が相争い血で血を洗う時に、太子御自身の徹底された自然の教であります。

柳瀬先生は九十をすぎられましたが近角常観、常音の両師に手をとられて信のともしびを点じられた方あります。「私は石ころ」とは聖人の「五濁悪時、悪世界、悪衆生・邪見・無信の者」と唯信鈔文意に仰言るところであり、釈迦如来が名号をあらゆる善の中より選びとられて、そうした私にお与下さるのであります。それなのに我慢の強い私共はそれがそれと気づき得ないのであります。

井上先生が続いて白井成充先生の御信徳を讃仰して下さいました。ことに短歌は解説下さらねばとかくうわすべりし易いものであります。懇切にお誌し下さって改めて白井先生にお会い申す思いがいたします。

西元先生の慈光日誌抄は、随所に輝く念仏のひかりを掲げて下さいました。その中に誌された宮地廓慧さんからお手紙を頂きました。お忙しい来日でお目にかかれな残会でありました。

木村無相さんの近信では、和上苑の二階の四人部屋のベッドに、腰痛と風邪熱で仰臥中のことでした。私は正月生れで、無相さん

は二月二十日生れ、共に八十歳を迎えますが、お互に峠路はきびしいことあります。歎異抄を十七歳がら六十余年拝読申して、ただ念仏に尽きるといだけられます。

ひと声 ひと声

如來のお出まし

ひと声 ひと声

浄土真宗

と喜び称えさせていただいておられます。久遠の友は大谷婦人会発行の「花すみれ」の九月号に記しましたもので、この年になって身にしみてよろこばせていただいております。又九月に病氣再発で三週間名大病院入院、十一日の今日退院させて頂きあとがきを誌しております。例会は十一月から続けさせて頂きます。御心配ばかりおかけし申し訳ありません。

定価	半年	一年	八〇〇円(送共)
			一六〇〇円(送共)
編集	名古屋市南区花田	正夫	
印刷	愛知県西加茂郡三好町大字福谷	光雄	
発行	名古屋市南区上町	光雄	
振替口座	名古屋	六二四七〇	
郵便番号	四五七		